情報提供

学び方を学ぶ

住田町立世田米中学校　校長　遠山　秀樹 氏

1　はじめに

(1) 本校の紹介

世田米中学校は気仙地区の中でも中山間部に位置し、緑豊かな山々に囲まれています。学区には清流気仙川が流れ、禁漁が解禁されると多くの釣り好きの方々で賑わいます。四季折々の景色を楽しむことができる自然豊かな環境の中にある本校ですが、生徒数は年々減少し現在は57名です。令和6年度からは有住中学校と統合し、住田中学校として開校します。

(2) 研究開発学校の取組

住田町内の小中学校と県立住田高等学校は、文部科学省より研究開発学校としての指定を受けて、新設教科「地域創造学」を教育課程に位置付けています。その目標は、「住田町及び近郊地域社会をフィールドに、探究的な学習を通して、新しい時代を切り拓き、社会を創造していくための社会的実践力を身に付けた心豊かな人材の育成」です。生徒たちは、住田町が抱える人口減や一層の魅力化をどう図っていくべきか等の課題に対し、自ら探究テーマを設定して課題解決学習に取り組んでいます。学習過程では、自己の学習計画に応じて校外に出向き、その道の専門家や地域の方々に聞き取り調査を行ったり、ご指導をいただきながら体験してみたりと様々です。最終的には、住田町の将来について理由や根拠を示しながら提言として発表会を行います。その場には、ご指導いただいた専門家の方々、保護者の皆様が参観に来校されます。

1年生：地域の専門の方から発表にアドバイスをいただいている場

学習指導要領では、学校と社会が「よりよい社会を創る」という目標を共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子ども達に育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指しています。地域創造学は町内の多くの方々との連携・協働によって支えられた学びであり、私としては地域の方々に感謝するとともに住田町のよさを感じているところです。

2　学び方を学ぶ

過去には、「何を理解しているか」に重きが置かれ、当時は「詰め込み教育」と呼ばれました。いかにして量を覚えるかが重要視された時代がありました。しかし、1989年以降は理解した知識やできるようになった技能を他の場面等で「どう使うか」、「使えることができるか」という学びが重要視されています。この「どう使うか」は、各教科でも指導されていますが、色濃い学びになっているのが「総合的な学習の時間（以下、総合の時間）」です。総合の時間では、「課題を設定→情報の収集→整理・分類→まとめ・表現」という探究的な学習を進めていきます。子ども達自らが設定した課題を身に付けた知識等を総動員しながら課題解決を目指し、自分の生き方を考える学びにもなっています。現在、高等学校では、小中学校での学びを更に深化させた「総合的な探究の時間」となり、各校の特色ある学びとしてユニークなネーミングも聞かれているところです（大船渡高校「大船渡学」、高田高校「T×ACTION」、一関一高「高志探究」等）。

住田町内各校の地域創造学は、総合の時間を更に深化させた学びとして研究開発する上で、学び方を学ぶことも目標の一つとなっています。しかし、これが難しい。本校の生徒の学習の様子を見ていると、全体的には試行錯誤しながら探究的な学習を楽しんでいます。特に楽しみ、有意義な学びとなるポイントは、町内の現状について多角的な視点から課題を見出し、課題の設定が自分事になっているかどうかだと思います。提言の場面でも、相手を意識し、自分の言葉でわかりやすい発表をしていますし、何より説得力があります。プロセスのどの段階も大切ですが、課題設定の段階が探究の肝のように感じています。

3　おわりに

今後の教育の動向を考えると、OECDのラーニング・コンパス（学びの羅針盤）が子ども達の学びに影響を与えるのではないでしょうか。ラーニング・コンパスは、生徒が教師の指導や指示をそのまま受け入れるのではなく、未知なる環境の中を自力で歩みを進め、責任をもって進むべき方向を自分で見出すことの大切さを強調するために採用された呼び名です。地域社会の問題に留まらず何気ない家庭での「なぜだろう？」という対話が起点となって学校での学びとなり、「そうか！」という新たな発見、気づきにつながったりもします。

学び方を学ぶためには、上手くいかない経験も貴重ではないかと考えます。学校の役割は「教える」から「伴走する」というイメージです。伴走には我慢も必要です。今後も家庭・地域の方々のご協力を得ながら子ども達のよき伴走者になれるよう努めていきます。

プロフィール

遠山　秀樹
（とおやま　ひでき）

水沢市立南中学校をスタートに、学校現場、県立総合教育センター、一関一高附属中学校、県教育委員会事務局に勤務。令和５年度より現職。